

スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi)

事業の検証に関する報告書

平成23年11月

国立教育政策研究所教育課程研究センター

教育課程調査官 向後 秀明

## 目 次

はじめに .....	2
1 事業概要 .....	3
(1) 事業趣旨 .....	3
(2) SELHi 指定校の内訳 .....	3
2 SELHi 指定校における研究開発課題 .....	4
3 アンケート調査の結果から見る SELHi 指定校における主な成果 .....	4
(1) 研究開発課題の達成, 指定終了後の研究成果の継承, 大学受験への効果 .....	4
(2) 生徒にみられた成果 .....	5
(3) 英語担当教員や学校にみられた成果 .....	6
(4) 学習評価についてみられた成果 .....	8
4 外部試験 (GTEC for STUDENTS) の結果から見る生徒の英語運用能力の変容 .....	8
(1) GTEC for STUDENTS の概要 .....	8
(2) SELHi 指定校 (SELHi 指定時及び SELHi 指定後) と非 SELHi 校の比較 .....	9
(3) 生徒の英語運用能力の変容に関する考察 .....	11
5 SELHi 指定校における英語教育の改善に関する考察 .....	12
(1) SELHi 指定校にみられたタイプ .....	12
(2) 研究成果のあった SELHi 指定校に共通する要素 .....	13
(3) 研究成果があがらなかった SELHi 指定校に共通する要素 .....	14
(4) SELHi 事業から得られた英語教育改善のためのポイント .....	15
6 SELHi 事業で得られた成果の継続性 .....	16
(1) アンケート調査概要 .....	16
(2) アンケート調査結果 .....	17
(3) SELHi 事業で得られた成果の継続性に関する考察 .....	18
(4) 回答結果に特徴がある高等学校 .....	19
7 文部科学省による SELHi 指定校の成果の活用 .....	22
(1) 高等学校学習指導要領「外国語」の改訂 .....	22
(2) 「英語教育改善のための調査研究事業」(平成 21 年度実施) への継承 .....	22
(参考資料) 研究成果のあった SELHi 指定校の事業報告 .....	23

## はじめに

様々な分野でグローバル化が急速に進展している状況の中、英語は、母語の異なる人々の間をつなぐ国際共通語として最も中心的な役割を果たしており、子どもたちが21世紀を生き抜くためには、国際共通語としての英語のコミュニケーション能力を身に付けることが不可欠である。

その一方、日本人の多くが、英語力が十分でないために、外国人との交流において制限を受けたり、適切な評価が得られないといった事態も生じている。

このようなことに鑑み、文部科学省では、平成14年7月に、『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』を作成した。この戦略構想に基づき、平成20年度を目指した英語教育の改善の目標や方向性を明らかにし、その実現のために国として取り組むべき施策として、平成15年3月31日に、『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』を策定した。

行動計画では、英語教育改善のためのアクションとして、次の点について、目標等が示されている。

1. 英語の授業の改善
2. 英語教員の指導力向上及び指導体制の充実
3. 英語学習へのモチベーションの向上
4. 入学者選抜等における評価の改善
5. 小学校の英会話活動の支援
6. 国語力の向上
7. 実践的研究の推進

上記1「英語の授業の改善」の一方策として、平成17年度までに計100校を目標に、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールを指定し、高等学校及び中等教育学校における先進的な英語教育を推進し、その成果の普及を図るために、「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール事業」が位置付けられた。

本事業は、実際には、平成14年度から21年度まで継続され、英語教育関係者を中心に、各方面から高い評価を得た。しかし、具体的にどのような成果が得られ、どのような点が問題であったのか、これまで必ずしも十分には検証が行われてこなかった。そこで、本事業を通して指定校の教員や生徒にいかなる変化があったのか、また、指定終了後の状況はどうであったか等を明らかにすることが、今後の英語教育の更なる改善のために必要であると考え、本報告書を作成することとした。

本報告書の作成全般について、国立教育政策研究所 徳永 保 所長、大槻 達也 次長から、懇切丁寧な御指導を賜った。また、検証方法について、平木 裕 教育課程調査官から、貴重な御助言をいただいた。さらに、生徒の英語運用力の変容について、株式会社ベネッセコーポレーションから多大なる御協力をいただくとともに、事業成果の継続性に対する調査では、第1期指定校及び第2期指定校に現在勤務されている多くの先生方に御回答いただいた。この場を借りて、心より御礼申し上げたい。

今後、日本の高校生が英語によるコミュニケーション能力を向上させていくための英語教育を展開していくに当たって、本報告書が少しでも役立つことがあれば幸いである。

平成23年11月

国立教育政策研究所 教育課程研究センター

教育課程調査官 向後 秀明

## 1 事業概要

### (1) 事業趣旨

文部科学省では、英語教育の先進事例となる学校づくりを推進するため、平成14年度より、英語教育を重点的に行う高等学校等をスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（以下「SELHi」と言う）として指定し、英語教育を重視したカリキュラムの開発、大学や中学校等との効果的な連携方策等についての実践研究を実施してきた。

SELHi 事業は平成19年度新規指定校をもって終了することとなったが、それまでの指定校による成果は、平成21年度以降、新しい学習指導要領の実施に向けた条件整備を重点的に実施するとともに、外国語教育の早期化、授業時数増等に関する調査研究等の英語教育の充実に資する施策を総合的に推進するために策定された英語教育改革総合プランの「英語教育改善のための調査研究事業」における高等学校の調査研究に引き続き活かされることとなった。

### (2) SELHi 指定校の内訳

#### ア 学校数の推移

- ・ 8年間で延べ166件169校。
- ・ 指定は平成19年度をもって終了。事業は平成21年度をもって終了。

指定年度	指定期間	学校（件）数	累計
H14年度	H14～16年度	18校，16件	18校，16件
H15年度	H15～17年度	35校，34件	53校，50校
H16年度	H16～18年度	35校，35件	88校，85件
H17年度	H17～19年度	31校，31件	119校，116件
H18年度	H18～20年度	34校，34件	153校，150件
H19年度	H19～21年度	16校，16件	169校，166件

#### イ 公立・私立の別，及び学科の種類

公立	69%
私立	31%

全学*	42%
特定のクラスまたはコース*	56%
無回答	2%

※「全学」は、英語科や国際科などの英語教育を主とする学科（以下「英語科等」）も含め学校全体で取り組んでいる学校であるが、普通科のみを有している学校が多い。

※「特定のクラスまたはコース」は、主に英語科等を有する学校。

（参考）

- ・ 公立高等学校数：3，598校
- ・ 上記3，598校の内、英語科等を有する公立学校数：144校  
（「平成22年度公立学校における教育課程の編成・実施状況調査」より）

## 2 SELHi 指定校における研究開発課題

SELHi 研究開発課題	公立	私立	合計
リスニング能力の開発・指導法の改善	55	20	75
スピーキング能力の開発・指導法の改善	70	24	94
リーディング能力の開発・指導法の改善	52	23	75
ライティング能力の開発・指導法の改善	70	34	104
語彙力の増強・指導法の改善	14	9	23
文法能力の開発・指導法の改善	9	5	14
内容中心の授業（イマージョンプログラムを含む）	19	10	29
独自テキスト・教材の開発（ICT 機器の活用を含む）	22	18	40
生徒の自律学習（学習ストラテジーを含む）の支援や指導	22	7	29
協働学習	16	10	26
生徒の学習意欲や態度の向上	47	20	67
生徒の英語能力の評価方法の開発（定期テストの改善を含む）	31	19	50
（Can-Do リストの作成などによる）到達目標の明確化	28	14	42
小・中・高・大や外部機関との連携	40	15	55
シラバスの開発	38	19	57
その他	18	13	31

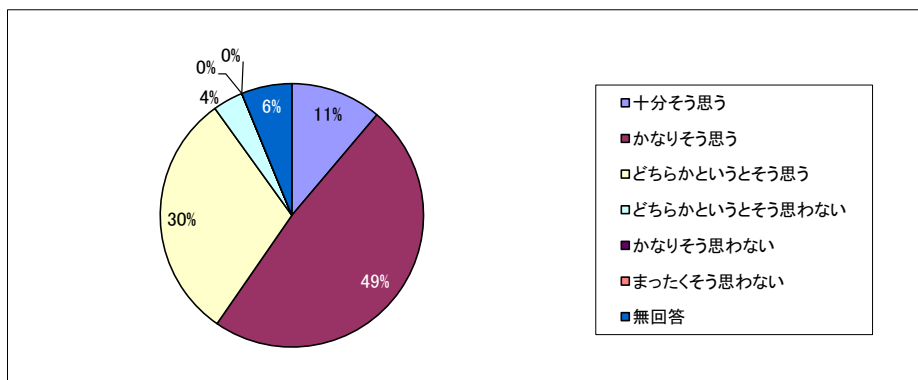
（上記数値は学校数）

## 3 アンケート調査の結果から見る SELHi 指定校における主な成果

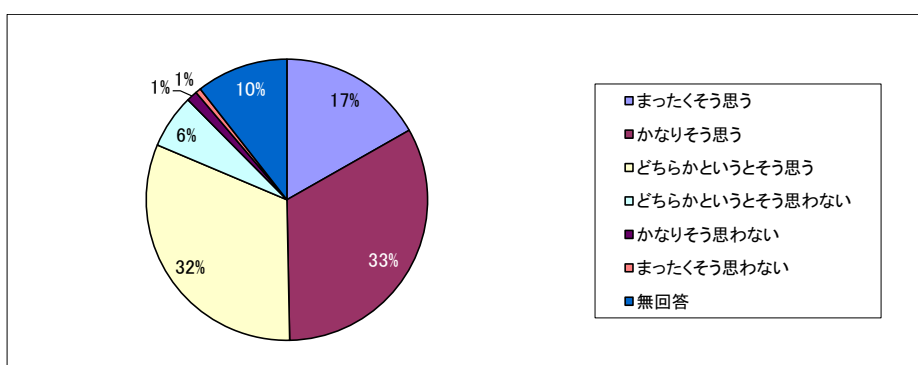
※「SELHi に関するアンケート」（平成20年11月～12月 対象161校 文部科学省初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室）の結果より

### （1）研究開発課題の達成，指定終了後の研究成果の継承，大学受験への効果

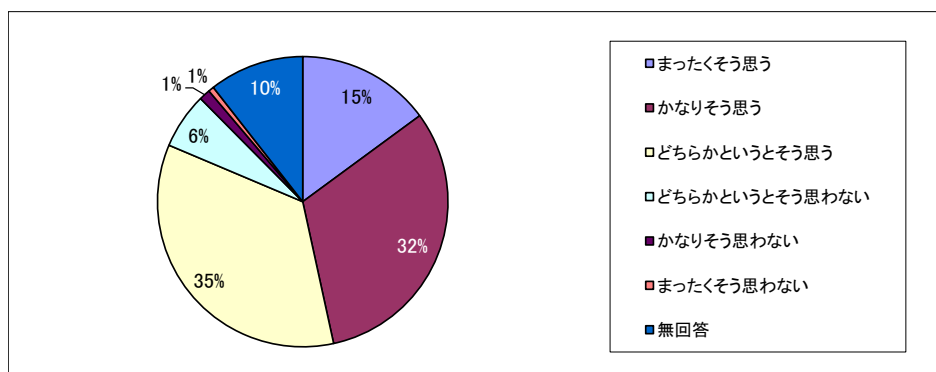
○ SELHi 指定終了時，研究開発課題は十分達成できたか。



○ SELHi 指定終了以降，研究成果は当校の現在の教育に十分に継承されているか。



○ SELHi 指定は生徒の大学受験に有益だったか。



## (2) 生徒にみられた成果

### ア 英語力の向上

- ・ 4 技能の総合的な能力の向上
- ・ 語彙力の向上 等

### イ 学習意欲や態度の向上

- ・ 授業中の英語使用時間の増加
- ・ 授業外の英語に関連する活動（英語スピーチ大会など）への参加
- ・ 外部試験結果のフィードバックによる学習意欲のさらなる向上 等

## <データ>

○ 生徒の英語力は向上したか。

### 【リスニング能力】

まったくそう思う	24.8%
かなりそう思う	36.6%
どちらかというと思う	29.8%
合計	91.2%

### 【スピーキング能力】

まったくそう思う	14.9%
かなりそう思う	39.1%
どちらかというと思う	36.0%
合計	90.0%

### 【リーディング能力】

まったくそう思う	8.0%
かなりそう思う	38.5%
どちらかというと思う	42.9%
合計	89.4%

### 【ライティング能力】

まったくそう思う	19.9%
かなりそう思う	42.9%
どちらかというと思う	28.6%
合計	91.4%

### 【文法力】

まったくそう思う	1.2%
かなりそう思う	13.0%
どちらかというと思う	51.6%
合計	65.8%

### 【語彙力】

まったくそう思う	5.0%
かなりそう思う	25.5%
どちらかというと思う	50.3%
合計	80.8%

○ 生徒の学習意欲や態度は向上したか。

【授業中の英語使用時間の増加】

まったくそう思う	29.2%
かなりそう思う	39.1%
どちらかというと思う	24.2%
合計	92.5%

【授業中の英語使用に対する意欲の向上】

まったくそう思う	16.8%
かなりそう思う	42.9%
どちらかというと思う	31.7%
合計	91.4%

【授業外の英語関連活動への参加の増加】

まったくそう思う	12.4%
かなりそう思う	36.0%
どちらかというと思う	36.0%
合計	84.4%

【外国人や外国文化への興味・関心の高まり】

まったくそう思う	18.6%
かなりそう思う	46.0%
どちらかというと思う	27.3%
合計	91.9%

【英語や外国語への興味・関心の高まり】

まったくそう思う	17.4%
かなりそう思う	48.4%
どちらかというと思う	26.7%
合計	92.5%

【日本語や日本文化への興味・関心の高まり】

まったくそう思う	4.3%
かなりそう思う	23.6%
どちらかというと思う	41.6%
合計	69.5%

(3) 英語担当教員や学校にみられた成果

ア 学校や学科における共通の指導体制の構築

- ・ 明確な到達目標の設定やシラバスの作成
- ・ 教材の開発と共有

(例) 多読指導用の教材 (事業終了後も継続している実践もあり)

イ 指導力の向上

- ・ 指導方法の多様性 (レパトリーの増加)
- ・ 英語担当教員同士による授業参観の定着  
(校内研究授業を年間10回以上実施の実践もあり)
- ・ 他校で開催される授業研究会等への積極的・計画的な参加
- ・ 外部試験の結果による評価を生かした指導の充実 等

ウ 英語による授業実践の定着

- ・ 授業研究の積み重ねを通じた英語による授業実践の完全な定着

エ 授業以外での英語使用環境の充実

- ・ 英語での校内放送や海外修学旅行, 外国人留学生との交流等による学校での英語使用環境の充実 等

オ 教育課程の工夫

- ・ ALT 主導による時事問題を扱う科目の設定 (学校設定科目として)
- ・ 「英語合宿」などの英語に関する活動を計画的に実施
- ・ 他教科の教員や ALT の協力を得て, 生物や地理などの授業を英語で実施 等

<データ>

○ 授業指導についてどのような変化があったか。

【英語教員間での年間・学期シラバス作成】

まったくそう思う	36.7%
かなりそう思う	29.8%
どちらかというと思う	19.3%
合計	85.8%

【英語で授業を実施】

まったくそう思う	25.5%
かなりそう思う	35.4%
どちらかというと思う	28.0%
合計	88.9%

【指導法の多様性（レパートリーの増加）】

まったくそう思う	36.0%
かなりそう思う	38.5%
どちらかというと思う	21.1%
合計	95.6%

○ 教員研修についてどのような変化があったか。

【英語教員相互の授業参観】

まったくそう思う	26.1%
かなりそう思う	38.5%
どちらかというと思う	24.8%
合計	89.4%

【英語教員同士のミーティング】

まったくそう思う	38.5%
かなりそう思う	32.9%
どちらかというと思う	19.9%
合計	91.3%

【英語教員間での教材の開発や共有】

まったくそう思う	37.3%
かなりそう思う	31.7%
どちらかというと思う	22.4%
合計	91.4%

【他校の公開授業や教員研修への参加】

まったくそう思う	29.8%
かなりそう思う	34.8%
どちらかというと思う	24.2%
合計	88.8%

○ 異校種や教育委員会、海外の高校や機関と連携するようになったか。

【地域の小学校や中学校との連携】

まったくそう思う	8.7%
かなりそう思う	11.8%
どちらかというと思う	31.7%
合計	52.2%

【大学との連携】

まったくそう思う	19.3%
かなりそう思う	24.2%
どちらかというと思う	34.8%
合計	78.3%

【教育委員会との連携】

まったくそう思う	8.7%
かなりそう思う	20.5%
どちらかというと思う	29.8%
合計	59.0%

【海外の高校や機関との連携】

まったくそう思う	12.4%
かなりそう思う	14.3%
どちらかというと思う	27.3%
合計	54.0%



○ 情報機器やコンピュータなどの ICT を活用するようになったか。

まったくそう思う	15.5%
かなりそう思う	31.1%
どちらかというと思う	33.5%
合計	80.1%

#### (4) 学習評価についてみられた成果

○ 評価についてどのような変化があったか。

##### 【到達目標の明確な設定】

まったくそう思う	20.5%
かなりそう思う	37.3%
どちらかというと思う	32.9%
合計	90.7%

##### 【英語能力伸長を測定する外部テストの活用】

年に2, 3回以上	16.8%
年に2, 3回程度	55.3%
年に1回	23.6%
3年間で1, 2回	2.5%

##### 【独自テストの開発】

リスニングテストを開発した	22.4%
スピーキングテストを開発した	44.7%
リーディングテストを開発した	21.1%
ライティングテストを開発した	34.8%
文法テストを開発した	5.0%
語彙テストを開発した	16.1%

##### 【定期考査の内容・実施方法の変化】

変わった	82.0%
変わらなかった	16.8%
無回答	1.2%

#### 4 外部試験（GTEC for STUDENTS）の結果から見る生徒の英語運用能力の変容

※全国英語教育学会（JASELE）（平成23年8月20日）における株式会社ベネッセコーポレーションによるプレゼンテーションより

※資料提供 株式会社ベネッセコーポレーション

##### (1) GTEC for STUDENTS の概要

###### ア 特徴

- ・日本の中・高校生の英語運用能力を測定。
- ・リーディング、リスニング、ライティングの3領域を測定。
- ・受験申込み及び受験は、学校単位。
- ・生徒一人一人の「英語の得意・不得意」に関わらず、全体の傾向を見ることが可能。
- ・絶対評価尺度。結果は「スコア」と「グレード」で表示。

###### イ SELHi 指定校における採択率

156校が研究成果検証のための指標として活用。

→ 採択率：第1期指定校67%～第6期指定校100%

###### ウ 平成22年度の受験者数

約44.4万人

## 推奨スコアガイドライン

Grade	Scores	Descriptors
7	710 and above	Advanced-Plus Learner
6	610~709	Advanced Learner
5	520~609	High Level (高校英語上級レベル)
4	440~519	Intermediate Level (高校英語中級レベル)
3	380~439	Primary Level (高校英語初級レベル)
2	300~379	Introductory Level
1	299 and below	Preparatory Level

高校卒業時  
推奨グレード

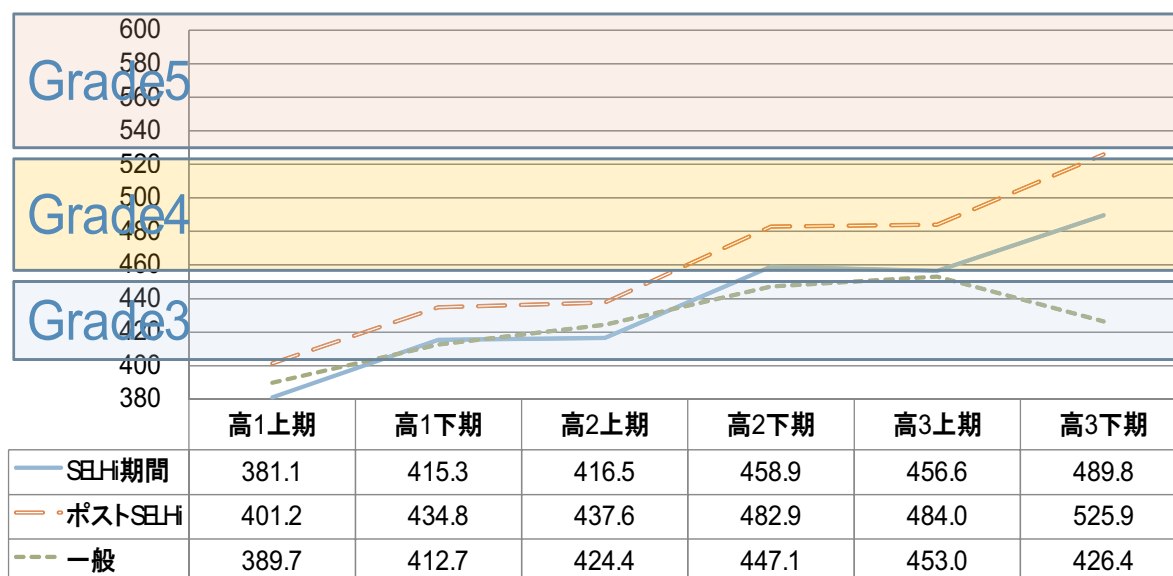
(c) 2011 Benesse Corporation, All rights reserved.

### (2) SELHi 指定校 (SELHi 指定時及び SELHi 指定後) と非 SELHi 校の比較

※平成14年度～平成21年度の高1～高3の受験結果を、SELHi 指定期間内、SELHi 指定期間後 (ポスト SELHi)、一般 (非 SELHi 校又は SELHi 指定前) の3つに分類して集計。

SELHi 期間 :	n=8,233~48,077
ポスト SELHi :	n=6,072~29,987
一般 (非指定校又は SELHi 指定前) :	n=31,423~566,499
上期=4月~9月, 下期=10月~3月	

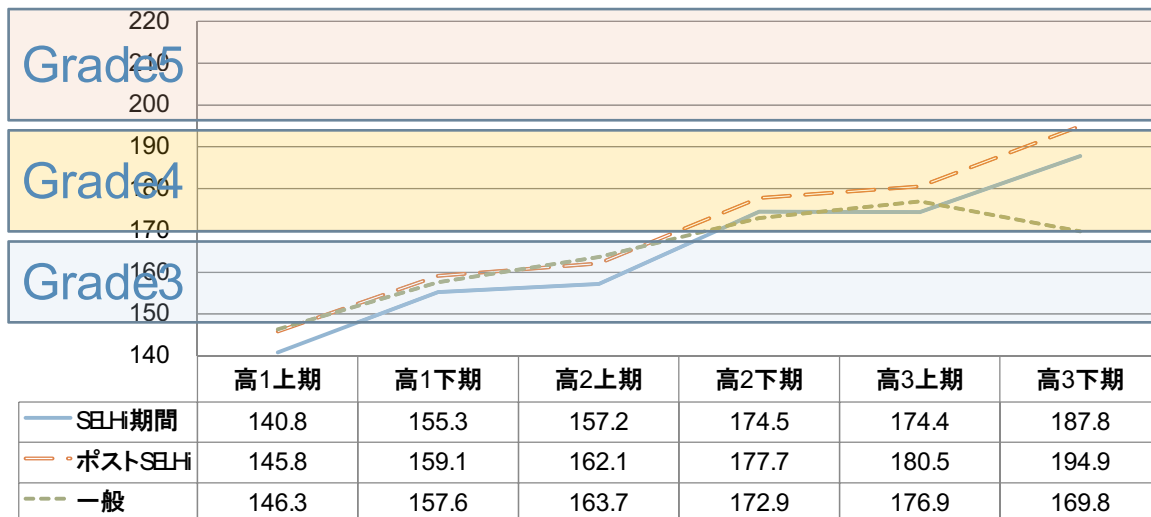
## TOTAL (0-800)



(c) 2011 Benesse Corporation, All rights reserved.

※同一生徒群を追跡したデータではありません

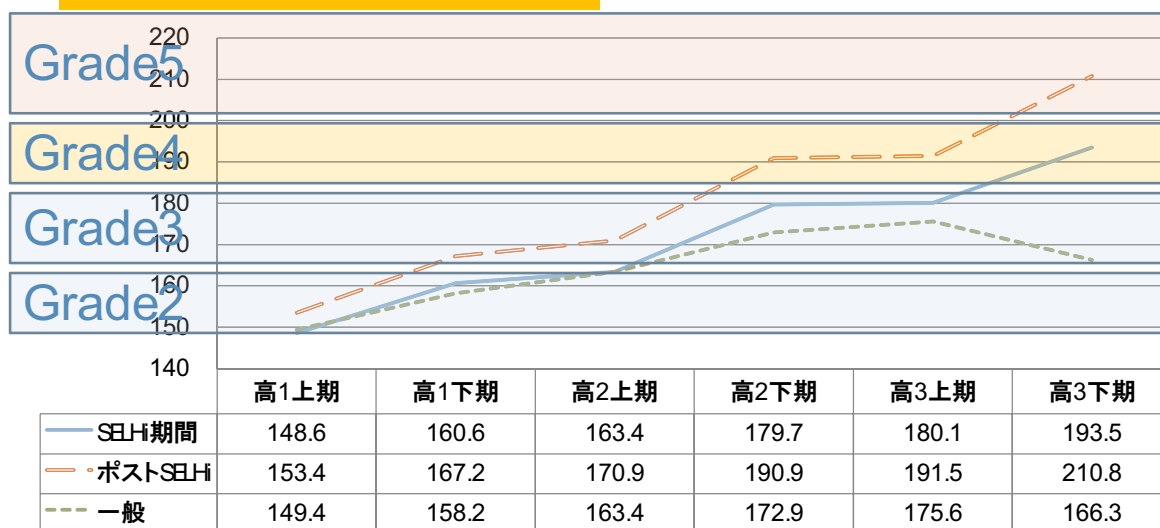
## READING (0-320)



(c) 2011 Benesse Corporation, All rights reserved.

※同一生徒群を追跡したデータではありません

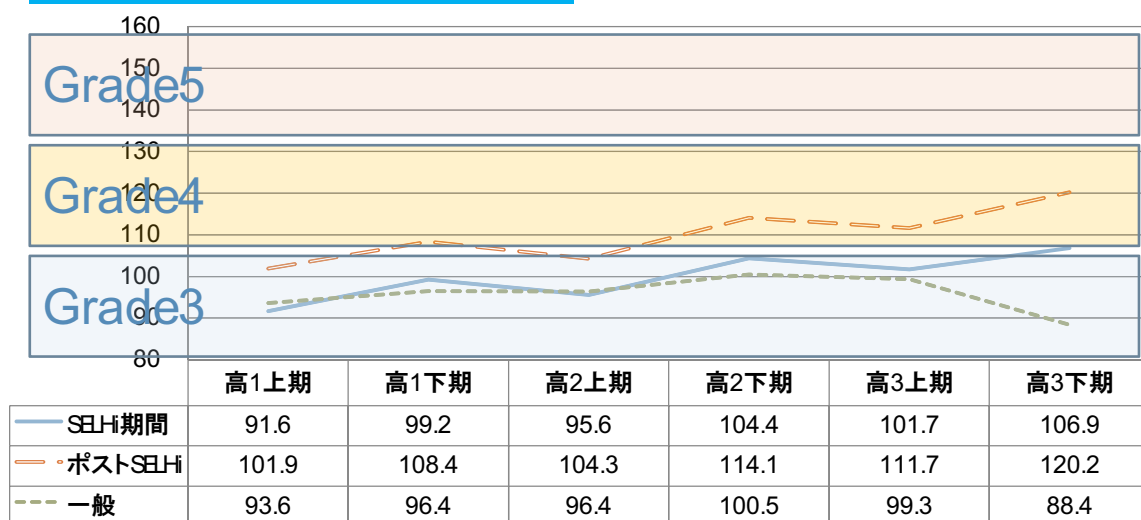
## LISTENING (0-320)



(c) 2011 Benesse Corporation, All rights reserved.

※同一生徒群を追跡したデータではありません

## WRITING (0-160)



(c) 2011 Benesse Corporation, All rights reserved.

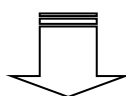
※同一生徒群を追跡したデータではありません

### (3) 生徒の英語運用能力の変容に関する考察

(高3上期)

※高3下期は受験者数が大幅に減少し、データの信頼性が低いため、高3上期のデータを参照。

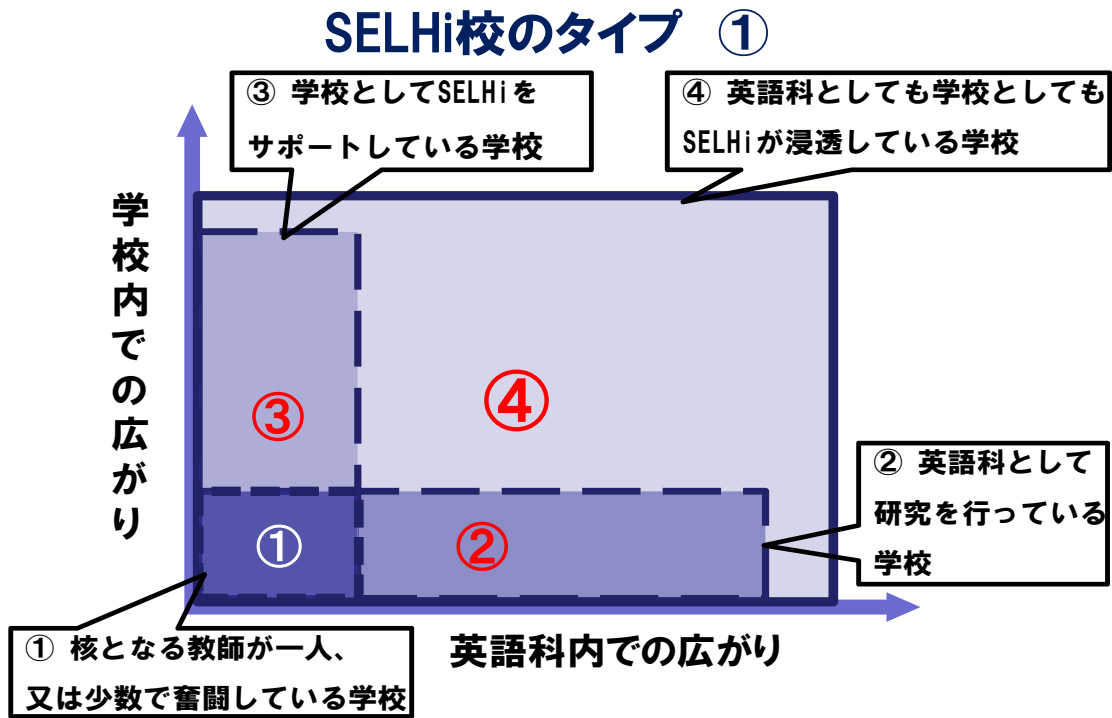
	TOTAL	READING	LISTENING	WRITING
SELHi 期間	456.6	174.4	180.1	101.7
ポスト SELHi	484.0	180.5	191.5	111.7
一般	453.0	176.9	175.6	99.3



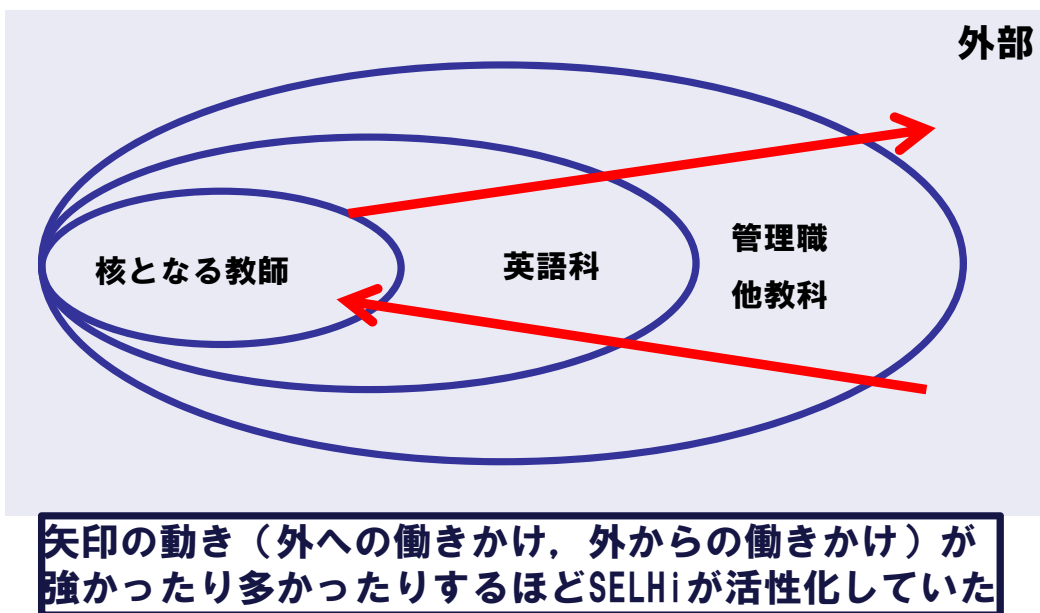
- SELHi 指定校と非 SELHi 校 (一般) とでは、平均スコアの観点から大きな差異は見られない。  
→ SELHi 指定校の平均スコアは、一般的な高等学校の縮図と考えられる。
- SELHi 期間とポスト SELHi では、各技能とも平均スコアに差が見られる。特に、リスニングの差異が顕著である。  
→ SELHi 指定校であっても、すぐに生徒の英語運用能力において成果が現れるとは限らない。  
→ SELHi 指定期間中に試行錯誤を繰り返し、そのことが外国語科や学校全体としての結束力を高めたり学習到達目標の明確化や指導技術の向上に結び付いたりした結果が、当該校のその後の英語教育にプラスの影響を与えたものと考えられる。

5 SELHi 指定校における英語教育の改善に関する考察

(1) SELHi 指定校にみられたタイプ

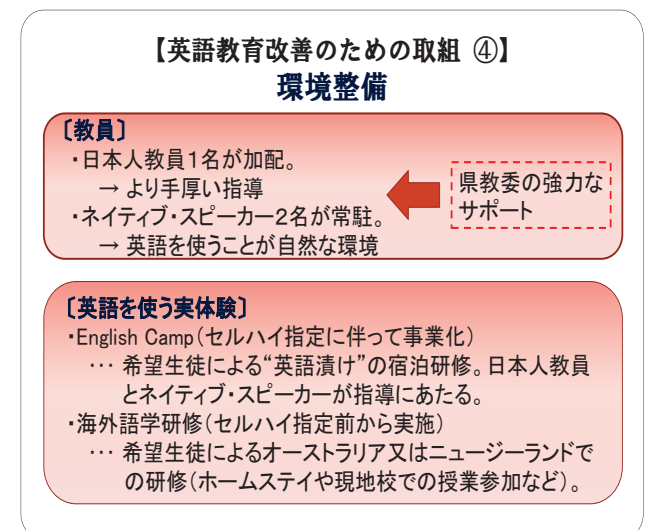
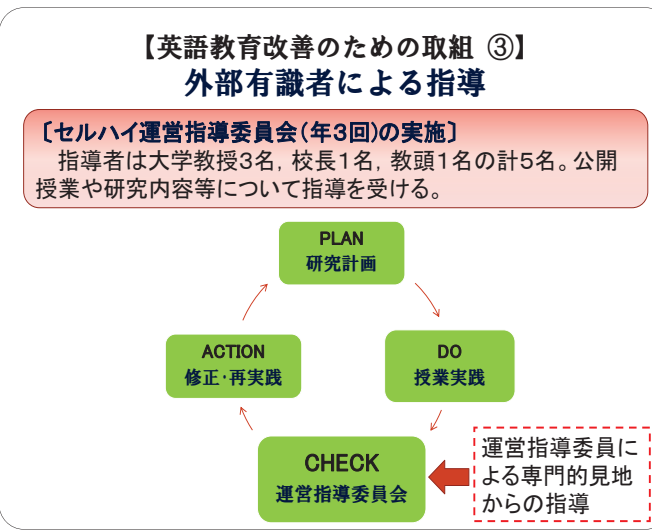
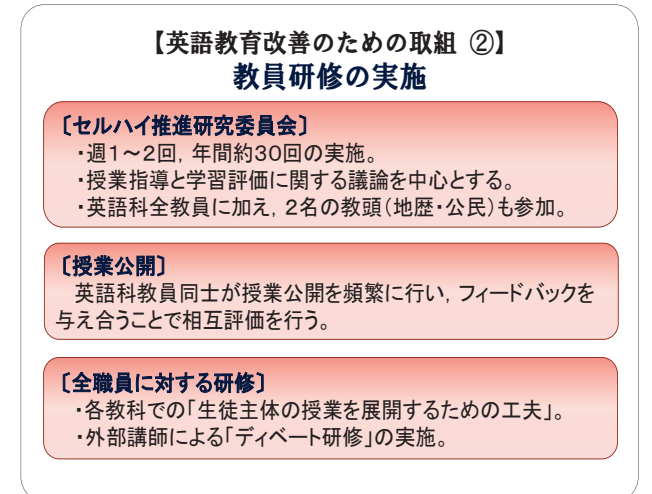
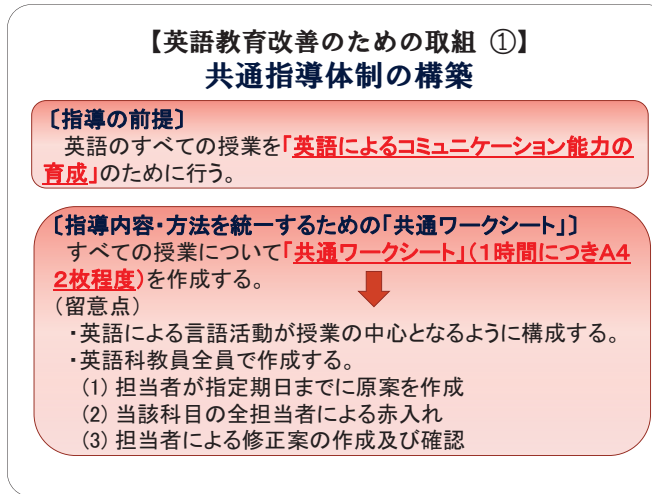
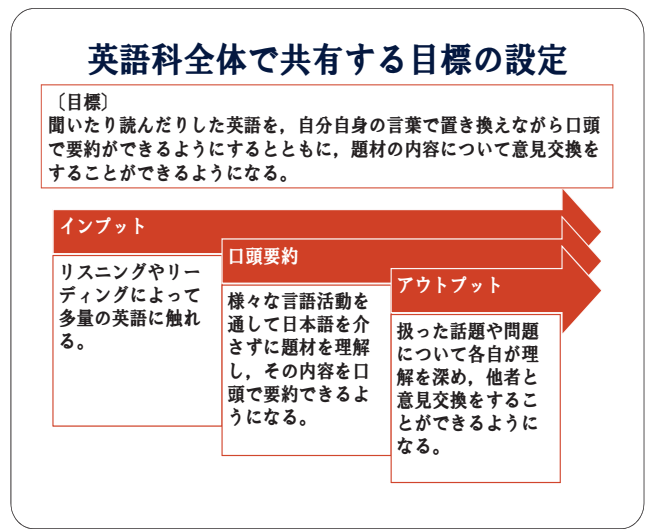
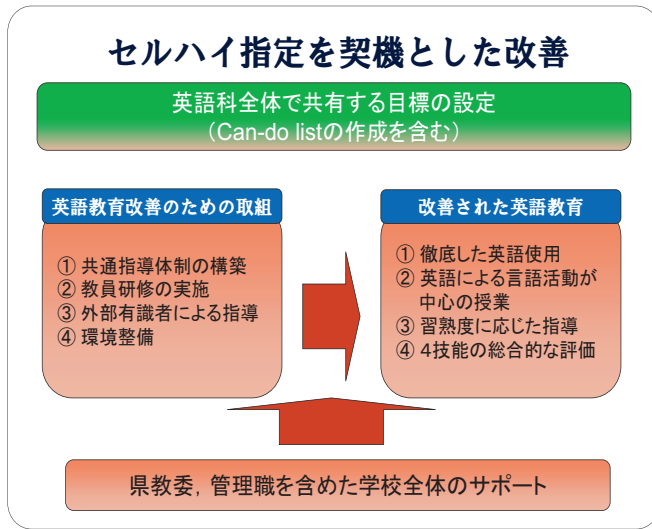


### SELHi校のタイプ ②



(2) 研究成果のあった SELHi 指定校に共通する要素 (平成17～19年度指定校の例)

ア 研究体制



## イ 英語教育における改善事項

### 【改善された英語教育 ①】 徹底した英語使用

#### 【授業内】

原則として**すべて英語**で行う。“大切なところは日本語で”という逃げ道を遮断)

#### 【共通ワークシート】

活動の指示を含め、英語のみで作成する。

#### 【授業外】

朝から放課後まで、英語科教員と生徒とのコミュニケーションは英語を用いて行う。(英語科や国際科等の専門学科を持たない学校におけるセルハイの可能性を追求)

### 【改善された英語教育 ②】 英語による言語活動が中心の授業

#### 【“教え込み”からの脱却】

教師が生徒に対して一方的に話すのではなく、ペア・ワークやグループ・ワークを通じた生徒自身による活動を授業の基本スタイルとする。

#### 【アウトプットの設定】

アウトプット活動を最終ゴールとし、“アウトプットするために読む(聞く)”という展開にする。

#### 【“What Do You Think?”の視点】

Content-basedで授業を展開し、トピックについてリサーチをすることで幅広く情報を収集し、最終的に自分の考えを述べるができるようにする。

### 【改善された英語教育 ③】 習熟度に応じた指導

#### 【習熟度別少人数クラス】

2クラスを3分割(又は3クラスを4分割)し、Basic/Intermediate(1, 2) /Advancedの3展開とする。

#### 【クラス編成】

定期考査の時期に合わせ、年5回クラス編成替えを行う。

#### 【担当教員】

各レベル別に担当する教員を1年間固定とし、習熟の程度に応じて安定した指導ができるようにする。

### 【改善された英語教育 ④】 4技能の総合的な評価

#### 【総合科目でのリスニング問題】

聞く・話す中心の「オーラル・コミュニケーション I」だけでなく、「英語 I」や「英語 II」などの総合科目でもリスニング・テストを実施。

#### 【スピーキング・テスト】

各学期に、インタビュー形式でのスピーキング・テストを実施。学習した題材に絡めて出題。

#### 【授業とリンクした筆記テスト】

定期考査において、英文の要約を完成させる問題や、自分の意見を書く問題を設定。

## (3) 研究成果があがらなかった SELHi 指定校に共通する要素

### ア 事業の申込時の問題点

- ・英語科教員の意味とは別に、教育委員会又は管理職直下型で事業に申し込んだ。
- ・SELHi の趣旨を理解せず、学校のPR材料として使うために申し込んだ。

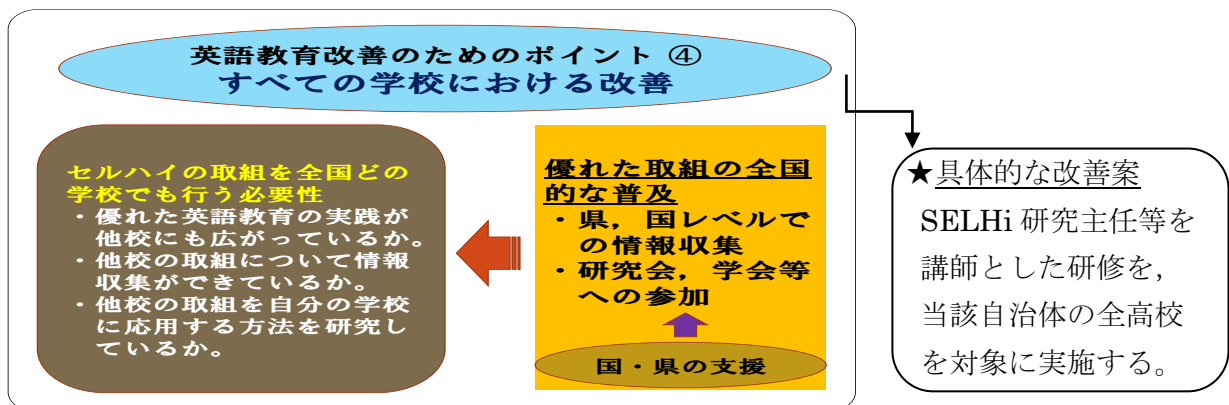
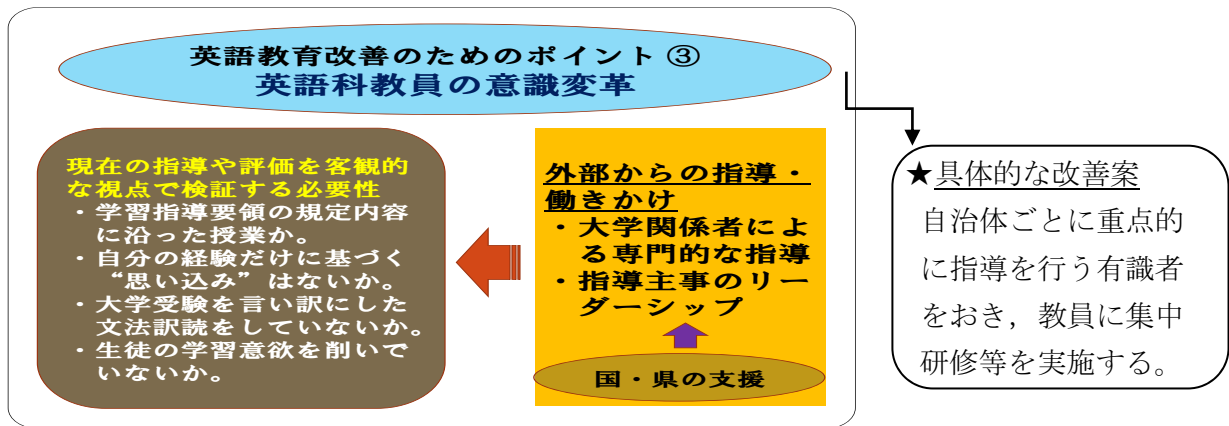
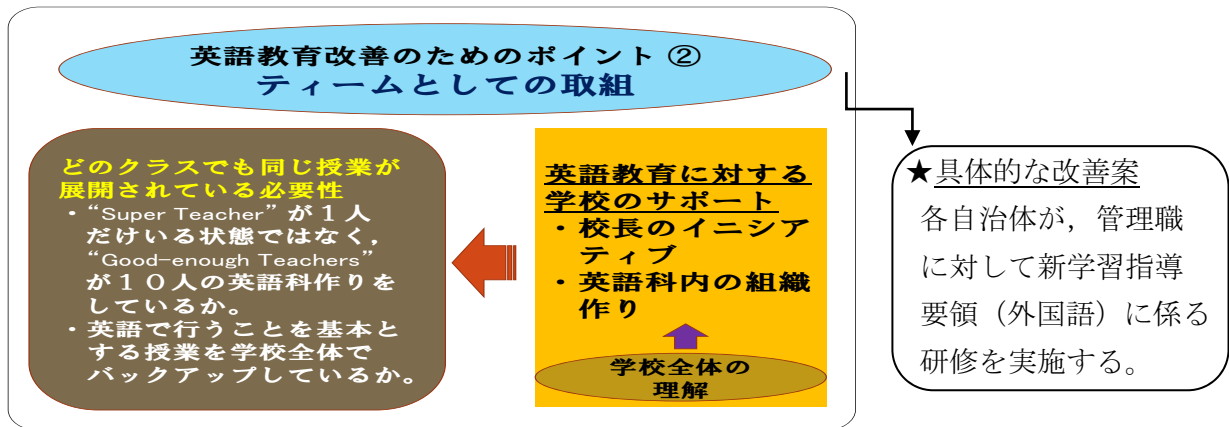
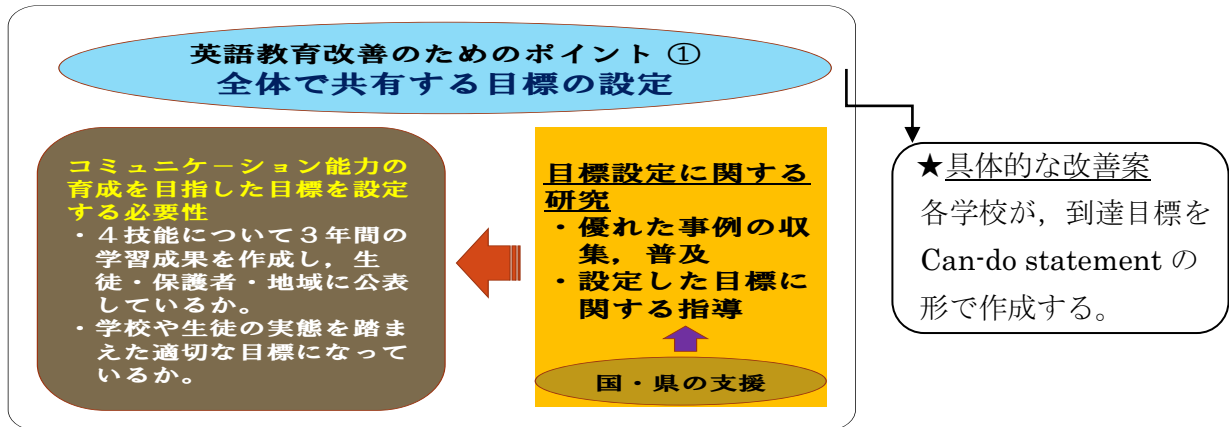
### イ 研究指定時の問題点

- ・英語科の中で核となる一人又は少数の教員のみで展開し、他の英語科教員を巻き込みながら協同で研究を進めることができなかった。
- ・英語科として努力をしたが、事業に対する学校全体又は管理職の理解が得られなかった。  
(大学入試に対する不安等)
- ・運営指導委員(大学教授等)の指導が適切ではなかった。
- ・教育委員会が指定校の研究に積極的に関わることなく、当該校任せになっていた。
- ・教育委員会による戦略的な人事が行われなかった。

### ウ 研究指定後の問題点

- ・指定が終了すると研究を推進してきた教員の多くが異動となり、研究成果が新任者に十分に引き継がれなかった。
- ・教育委員会などによる指定校の研究成果を普及させる体制が十分ではなかった。

(4) SELHi 事業から得られた英語教育改善のためのポイント





## 6 SELHi 事業で得られた成果の継続性

### (1) アンケート調査概要

SELHi 事業が有効な施策であったかどうかを検証する一方法として、各指定校が SELHi 事業で得られた成果等を指定終了後も継続できているかという視点で、以下のアンケート調査を行った。

#### ア 調査時期

平成 23 年 9～10 月

#### イ 調査対象

平成 14 年度及び 15 年度 (SELHi 事業の最初の 2 年間) の SELHi 指定校に現在勤務している外国語科 (英語科) の教員

[平成 14 年度～16 年度指定校] ※ SELHi 指定期間終了後約 7 年が経過

16 件 18 校 有効回答者数 16 校 (88.9%) 174 人  
(内 1 校は平成 14 年度～19 年度の 2 期連続指定)

[平成 15 年度～17 年度指定校] ※ SELHi 指定期間終了後約 6 年が経過

34 件 35 校 有効回答者数 24 校 (68.6%) 227 人  
(内 3 校は平成 15 年度～20 年度の 2 期連続指定)

計 50 件 53 校 のうち 40 校 (75.5%) 401 人

#### ウ 調査内容

下の各問について、①ほぼそう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらかといえばそう思わない ④ほぼそう思わない の 4 つのうちから最も当てはまるものを 1 つ選び、「回答番号」の欄に番号を記入してください。

問 1 貴校は、平成 14 年度又は平成 15 年度に文部科学省の事業であるスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi) に指定されましたが、現在でも、SELHi 指定校であったことのアイデンティティーが残っていると思いますか。

※「アイデンティティーが残っている」とは、例えば、SELHi 指定時に研究開発した成果が現在の授業でも生かされている、現在でも教員が共通の指導内容・方法で授業を行っているといったことを意味します。

回答番号 \_\_\_\_\_

問 2 貴校は、SELHi 指定の終了後 6～7 年が経過していますが、現在でも管理職や他教科の先生方は、貴校の英語教育に対して理解がある (サポートがある) と思いますか。

回答番号 \_\_\_\_\_

問 3 貴校の生徒は、貴校で英語教育を受けることによって、高等学校入学時に同程度の力を有すると考えられる他校の生徒と比較してより高い英語力を身に付けていると思いますか。

※SELHi 指定時ではなく、現在の状況についてお考えください。

回答番号 \_\_\_\_\_

(2) アンケート調査結果

問1 貴校は、平成14年度又は平成15年度に文部科学省の事業であるスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi) に指定されましたが、現在でも、SELHi 指定校であったことのアイデンティティーが残っていると思いますか。

【回答者人数】 H14 指定校：16校174人／H15 指定校：24校227人 計：40校401人

	ほぼそう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	ほぼそう思わない
H14 指定校 (回答数) 割合	(62 人) 35.6 %	(76 人) 43.7 %	(25 人) 14.4 %	(11 人) 6.3 %
H15 指定校 (回答数) 割合	(84 人) 37.0 %	(84 人) 37.0 %	(38 人) 16.7 %	(21 人) 9.3 %
計 (回答数) 割合	(146 人) 36.4 %	(160 人) 39.9 %	(63 人) 15.7 %	(32 人) 8.0 %

問2 貴校は、SELHi 指定の終了後6～7年が経過していますが、現在でも管理職や他教科の先生方は、貴校の英語教育に対して理解がある（サポートがある）と思いますか。

【回答者人数】 H14 指定校：16校174人／H15 指定校：24校227人 計：40校401人

	ほぼそう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	ほぼそう思わない
H14 指定校 (回答数) 割合	(50 人) 28.7 %	(77 人) 44.3 %	(38 人) 21.8 %	(9 人) 5.2 %
H15 指定校 (回答数) 割合	(65 人) 28.6 %	(96 人) 42.3 %	(48 人) 21.1 %	(18 人) 7.9 %
計 (回答数) 割合	(115 人) 28.7 %	(173 人) 43.1 %	(86 人) 21.4 %	(27 人) 6.7 %

問3 貴校の生徒は、貴校で英語教育を受けることによって、高等学校入学時に同程度の力を有すると考えられる他校の生徒と比較してより高い英語力を身に付けていると思いますか。

【回答者人数】 H14 指定校：16校174人／H15 指定校：24校227人 計：40校401人

	ほぼそう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	ほぼそう思わない
H14 指定校 (回答数)	(70 人)	(84 人)	(16 人)	(4 人)
割合	40.2 %	48.3 %	9.2 %	2.3 %
H15 指定校 (回答数)	(101 人)	(105 人)	(18 人)	(3 人)
割合	44.5 %	46.3 %	7.9 %	1.3 %
計 (回答数)	(171 人)	(189 人)	(34 人)	(7 人)
割合	42.8 %	47.1 %	8.5 %	1.7 %

### (3) SELHi 事業で得られた成果の継続性に関する考察

#### ア 維持されている SELHi 校としてのアイデンティティ

SELHi 指定1期校及び2期校のほとんどは、指定期間終了後7年又は6年が経過しており、実際に SELHi 事業に関わった教員の多くはすでに異動しているものと思われる。そのようななかであって、「問1」に対し「ほぼそう思う」又は「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は76.3%と高い。このことから、少なくとも1期校及び2期校については、SELHi 指定時に実践研究を行った成果が現在の授業でも生かされていると言えよう。

#### イ 学校によって異なる管理職や他教科からのサポート

多くの SELHi 指定校では、外国語科のみならず、教科の枠を越えて当該校の英語教育や事業全体への協姿勢が見られた。その状態が現在でも続いているかどうかに関する「問2」では、「ほぼそう思う」又は「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は71.8%であったが、同時に、「どちらかといえばそう思わない」と回答した割合も21.4%であり、学校によってかなり様子が異なると思われる。SELHi 校としてのアイデンティティは残っているものの、管理職や他教科からのサポートが十分ではないと感じている学校も数校見受けられた。

(「6(4) 回答結果に特徴がある高等学校 ウ」参照)

#### ウ 旧 SELHi 校で身に付く高い英語力

本調査結果で特徴的なことの一つは、「問3」で「ほぼそう思う」又は「どちらかといえばそう思う」と回答した割合が89.9%と非常に高いことである。このことは、外部試験においてポスト SELHi 校の平均スコアが高いことと併せ、SELHi 校が事業終了後もその成果を生かして英語教育を展開している可能性を示すものとして興味深い。

(「4 外部試験 (GTEC for STUDENTS) の結果から見る生徒の英語運用能力の変容」参照)

(4) 回答結果に特徴がある高等学校

ア 現在も SELHi 指定校としてのアイデンティティーが残り、管理職や他教科からのサポートがあり、更に、他校と比較して生徒がより高い英語力を身に付けている学校

A高等学校 (回答者数7人)				
問	回答①	回答②	回答③	回答④
1	7人(100%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)
2	7人(100%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)
3	7人(100%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)



アイデンティティー：100%/管理職・他教科のサポート：100%  
他校より高い英語力：100%

B高等学校 (回答者数8人)				
問	回答①	回答②	回答③	回答④
1	8人(100%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)
2	8人(100%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)
3	7人(87.5%)	1人(12.5%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)



アイデンティティー：100%/管理職・他教科のサポート：100%  
他校より高い英語力：100%

イ 現在も SELHi 指定校としてのアイデンティティーが残り、他校と比較して生徒がより高い英語力を身に付けている学校

C高等学校 (回答者数10人)				
問	回答①	回答②	回答③	回答④
1	7人(70.0%)	3人(30.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)
2	3人(30.0%)	3人(30.0%)	4人(40.0%)	0人(0.0%)
3	6人(60.0%)	4人(40.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)



アイデンティティー：100%/他校より高い英語力：100%

D高等学校 (回答者数13人)				
問	回答①	回答②	回答③	回答④
1	8人(61.5%)	5人(38.5%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)
2	6人(46.2%)	6人(46.2%)	0人(0.0%)	1人(7.7%)
3	8人(61.5%)	5人(38.5%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)



アイデンティティー：100%/他校より高い英語力：100%

ウ 現在も SELHi 指定校としてのアイデンティティーが残り，他校と比較して生徒がより高い英語力を身に付けているが，管理職や他教科からのサポートが少ない高等学校

E 高等学校 (回答者数 7 人)				
問	回答①	回答②	回答③	回答④
1	5 (71.4%)	0人 (0.0%)	2人 (28.6%)	0人 (0.0%)
2	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	7人 (100%)	0人 (0.0%)
3	4 (57.1%)	3人 (42.9%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

アイデンティティー：71.4%  
他校より高い英語力：100%

低い管理職・他教科のサポート：100%

F 高等学校 (回答者数 13 人)				
問	回答①	回答②	回答③	回答④
1	8人 (61.5%)	5人 (38.5%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)
2	0人 (0.0%)	4人 (30.8%)	9人 (69.2%)	0人 (0.0%)
3	7人 (53.8%)	3人 (23.1%)	3人 (23.1%)	0人 (0.0%)

アイデンティティー：100%  
他校より高い英語力：76.9%

低い管理職・他教科のサポート：69.2%

エ 現在も管理職や他教科からのサポートはあるが，SELHi 指定校としてのアイデンティティーが薄れている高等学校

G 高等学校 (回答者数 11 人)				
問	回答①	回答②	回答③	回答④
1	0人 (0.0%)	2人 (18.2%)	4人 (36.4%)	5人 (45.5%)
2	2人 (18.2%)	7人 (63.6%)	2人 (18.2%)	0人 (0.0%)
3	3人 (27.3%)	7人 (63.6%)	0人 (0.0%)	1人 (9.1%)

管理職・他教科のサポート：81.8%  
(ただし，他校より高い英語力：90.9%)

アイデンティティー喪失：81.9%

H 高等学校 (回答者数 11 人)				
問	回答①	回答②	回答③	回答④
1	0人 (0.0%)	2人 (18.2%)	5人 (45.5%)	4人 (36.4%)
2	0人 (0.0%)	8人 (72.7%)	3人 (27.3%)	0人 (0.0%)
3	4人 (36.4%)	5人 (45.5%)	2人 (18.2%)	0人 (0.0%)

管理職・他教科のサポート：72.7%  
(ただし，他校より高い英語力：81.9%)

アイデンティティー喪失：81.9%

オ SELHi 指定校としてのアイデンティティーは薄れているが、他校と比較して生徒がより高い英語力を身に付けている学校

I 高等学校 (回答者数 7 人)				
問	回答①	回答②	回答③	回答④
1	0 人 ( 0. 0%)	2 人 ( 2 8. 6%)	3 人 ( 4 2. 9%)	2 人 ( 2 8. 6%)
2	0 人 ( 0. 0%)	5 人 ( 7 1. 4%)	1 人 ( 1 4. 3%)	1 人 ( 1 4. 3%)
3	1 人 ( 1 4. 3%)	6 人 ( 8 5. 7%)	0 人 ( 0. 0%)	0 人 ( 0. 0%)

他校より高い英語力：100%

アイデンティティー喪失：71.5%

J 高等学校 (回答者数 10 人)				
問	回答①	回答②	回答③	回答④
1	0 人 ( 0. 0%)	3 人 ( 3 0. 0%)	3 人 ( 3 0. 0%)	4 人 ( 4 0. 0%)
2	0 人 ( 0. 0%)	5 人 ( 5 0. 0%)	4 人 ( 4 0. 0%)	1 人 ( 1 0. 0%)
3	1 人 ( 1 0. 0%)	6 人 ( 6 0. 0%)	3 人 ( 3 0. 0%)	0 人 ( 0. 0%)

他校より高い英語力：70.0%

アイデンティティー喪失：70.0%

カ SELHi 指定校としてのアイデンティティーが薄れ、管理職や他教科からのサポートも少なく、他校と比較して生徒の英語力も高いとは言えない学校

K 高等学校 (回答者数 10 人)				
問	回答①	回答②	回答③	回答④
1	0 人 ( 0. 0%)	3 人 ( 3 0. 0%)	4 人 ( 4 0. 0%)	3 人 ( 3 0. 0%)
2	0 人 ( 0. 0%)	2 人 ( 2 0. 0%)	5 人 ( 5 0. 0%)	3 人 ( 3 0. 0%)
3	1 人 ( 1 0. 0%)	4 人 ( 4 0. 0%)	2 人 ( 2 0. 0%)	3 人 ( 3 0. 0%)

アイデンティティー喪失：70.0% / 低い管理職・他教科のサポート：80.0%  
 / 他校より高いとは言えない英語力：50.0%

L 高等学校 (回答者数 7 人)				
問	回答①	回答②	回答③	回答④
1	1 人 ( 1 4. 3%)	3 人 ( 4 2. 9%)	0 人 ( 0. 0%)	3 人 ( 4 2. 9%)
2	0 人 ( 0. 0%)	2 人 ( 2 8. 6%)	2 人 ( 2 8. 6%)	3 人 ( 4 2. 9%)
3	0 人 ( 0. 0%)	3 人 ( 4 2. 9%)	2 人 ( 2 8. 6%)	2 人 ( 2 8. 6%)

アイデンティティー喪失：42.9% / 低い管理職・他教科のサポート：71.5%  
 / 他校より高いとは言えない英語力：57.2%

## 7 文部科学省による SELHi 指定校の成果の活用

### (1) 高等学校学習指導要領「外国語」の改訂

ア 第3款の4に「授業は英語で行うことを基本とする」旨を明記

4 英語に関する各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする。

イ 科目の再編

現行学習指導要領「外国語」	新学習指導要領「外国語」
○「オーラル・コミュニケーションⅠ」 (標準2単位) ※	○「コミュニケーション英語基礎」 (標準2単位)
○「オーラル・コミュニケーションⅡ」 (標準4単位)	○「コミュニケーション英語Ⅰ」 (標準3単位) ※必履修
○「英語Ⅰ」 (標準3単位) ※	○「コミュニケーション英語Ⅱ」 (標準4単位)
○「英語Ⅱ」 (標準4単位)	○「コミュニケーション英語Ⅲ」 (標準4単位)
○「リーディング」 (標準4単位)	○「英語表現Ⅰ」 (標準2単位)
○「ライティング」 (標準4単位)	○「英語表現Ⅱ」 (標準4単位)
※「オーラル・コミュニケーションⅠ」又は 「英語Ⅰ」の選択必履修	○「英語会話」 (標準2単位)

### (2) 「英語教育改善のための調査研究事業」(平成21年度実施)への継承

ア 事業の目的

英語教育に関する教育課程等の改善に資する実証的資料を得るために実施。

イ SELHi 指定校の扱い

SELHi 事業の高等学校については、SELHi の成果を踏まえたより充実した内容の研究を実施(平成21年度指定校は43校)。

## (参考資料) 研究成果のあった SELHi 指定校の事業報告

※ 次ページ以降の資料は、SELHi 事業の成果として、SELHi 企画評価会議の委員が実際に学校で実地調査等を行い、その中で成果が明確にあったと考えられる学校について、

- ・申請時の状況
- ・研究開発課題
- ・組織
- ・指導方法
- ・成果

等について、担当の委員がまとめたものである。

報告によると、SELHi の成果と考えられるキーワードとして、以下のようなものがあげられる。

- ① 指導方法の改善
  - ・英語による授業実践
  - ・教材の共有化
  - ・カリキュラムの共有化
- ② 学校組織体制の確立
  - ・管理職のリーダーシップ
  - ・外国語科のみならず他教科の教員との連携
  - ・学校の組織化、情報の共有化

上記のとおり、管理職、他教科の教員も含む学校全体で取り組む体制をつくり、外国語科の教員が互いの授業を研究し、教材を共有しながら英語による授業を実践していくことにより、生徒の英語力向上につながっていくものと考えられる。



## 【1】千葉県立成田国際高等学校

英語科の専門科目と他教科の科目を関連付けた指導等により、  
英語によるコミュニケーション能力の伸長を図る指導方法の研究

### はじめに

千葉県立成田国際高校は、文部科学省が英語教育における先進的な取り組みを求めて指定したSELHiの第1期指定校である。研究課題が示す通り、英語科と他教科の教員が力を合わせて克服しなければ達成しえない難題に果敢に取り組んだ結果、多くの示唆に富む成果を出している。特に、Content-based Teachingにおける教員の連携（ALTとJTE、英語科の教員間、英語科と他教科の教員間）の在り方と指導法に関して得られた知見は、実践に裏付けられたものであるだけに極めて説得力がある。さらに、SELHiが終了した時点で今後の課題として残った問題点を明確にし、SELHi終了後にも「C-SELHi」（Chiba SELHi：チバ・セルハイ）として、千葉県教育委員会の支援のもとに、SELHiに携わった教員がその成果を伝えるべく後輩の指導をしつつ研究を継続し、授業改善に向けて一層の努力をした点も高く評価できる。以下に、その概略を示す。

### 1 申請時の状況

成田国際高校は、千葉県内では初の英語科設置校（1987年）として、また国際高校（1992年に校名変更）として、千葉県の外国語教育と国際理解教育の推進役を担ってきた。申請時には、すでに次のような蓄積があった。

- ・ALTと日本人教師によるチーム・ティーチング
- ・英語によるインタラクティブな授業
- ・英語科セミナーなどの英語教育関連行事、課外活動
- ・国際理解教育関連行事 など

しかしながら、その一方で、SELHiの研究課題として掲げた「英語以外の教科を英語で指導する方法を研究し実践すること」については、職員全体にかなりの不安があった。

### 2 研究開発課題

「英語を学ぶ」から「英語で学ぶことのできる学習者」の育成を目指して、英語科の専門科目と他教科の科目を関連付けて指導し、英語のコミュニケーション能力の伸長を図る指導方法の研究を行う。

### 3 研究目標

- (1) ALTの専門性を生かした英語によるContent-based Teachingの授業法の開発
- (2) 他教科の内容の一部（単元等）を英語で指導する授業法の開発
- (3) ディベートによる実践的コミュニケーション能力の伸長を図る指導法と評価法の研究
- (4) 英語使用の機会増大を図る体制づくりと環境の整備

## 4 組織

成田国際高校のSELHiに関する組織は、次のとおりである。

### (1) 校内研究推進委員会

教頭2名，英語科教員8名（研究主任，英語学科長，英語科主任，国際教育部長，進路指導部長，各学年英語科担任1名），ALT代表1名，他教科協力委員8名（教務主任，各教科主任7名）

\*ただし，年度により構成は多少異なる。

### (2) 運営指導組織（外部指導助言者）

大学教授3名，高等学校長1名，高等学校教諭2名，小学校教諭1名，成田市教育委員会1名，成田市国際交流協会1名，指導主事3名（運営委員会開催時）

## 5 指導方法・成果・課題

SELHiの4つの研究目標とその指導方法，成果及び今後の課題は，次のとおりである。

### (1) ALTの専門性を生かしたContent-based Teachingの授業

#### ア 指導方法

ALTが大学で学んだ分野（米文学・生物・歴史・社会学・時事問題）の知識を生かした授業を，英語科の2・3年生を対象に，週1時間（通年または半期）英語のみで指導した。指導形態としては，ALTが主導し，JTEは補助役のティーム・ティーチング（TT）であった。ALTは主に年間計画の立案，教材，評価テストの準備，レポート・テストの評価を行い，JTEは生徒の理解支援と学習内容・評価規準の策定等を行った。

#### イ 成果

- ① 英語のインプット量の飛躍的増大
- ② 英語で主体的に考え，英語で論理的に意見を述べたり書いたりする総合的な英語のコミュニケーション能力の伸長
- ③ 英語そのものへの興味・関心・視野の広がり
- ④ ALTとJTEの授業研究への意識高揚

#### ウ 課題

- ① 土台となる英語力があることが前提となる。特に，1年次に「聞くこと」「読むこと」の学習の徹底が必須である。
- ② 学力の高い生徒の伸びはめざましいが，低い生徒の力を伸ばすことは難しい。学習支援の徹底が不可欠である。
- ③ 学習分野の基礎知識や個々の生徒の授業への意欲が，授業の効果を左右する。適切で，恒久的な分野の選択が重要となる。
- ④ 指導のコンテンツについて専門的な知識を持ち，それを高校生対象として指導できるALTの確保が不可欠である。

(2) 他教科の内容の一部(単元等)を英語で指導する授業

ア 指導方法

学科(普通科, 英語科, 国際教養科)と学年を特定せず, 不定期な単発授業として実施した。

- ① 教科担当者+ALT+JTEのTT(数学・保健・化学・世界史・音楽・演劇演習・情報・古典)
- ② 当該教科担当者+ALTのTT(生物・地理・現代文)
- ③ JTE+ALTのTT(生物)
- ④ JTE単独指導(数学)

イ 成果

- ① 当該教科学習への動機付け
- ② 教科内容に関する英語語彙の習得
- ③ 普通科の生徒が「英語で学ぶ」機会の増加

ウ 課題

- ① 他教科と連携するための準備時間と教員数の確保が不可欠である。
- ② 学習の進捗と深度への影響を考慮した十分な授業時間の確保が前提となる。

(3) ディベートによる実践的コミュニケーション能力の伸長を図る指導法と評価法の研究

ア 指導方法

「英語科セミナー」(秋の英語合宿)を, 次の手順で体系的に実施した。

- ① 1年生の「英語科セミナー事前指導」
- ② 1年生の「英語科セミナー」(ディベート体験)
- ③ 2年生の「ディベート授業」(ALT中心のTTを週1時間ずつ通年)
- ④ 2年次の「英語科セミナー」(ディベート・トーナメントの実施)

イ 成果

- ① 4技能のバランスよい伸長
- ② 相手の話を集中して聞いてメモをとり, 相手にわかりやすく, 説得力ある話し方で意見を言うなどの実践的コミュニケーション能力の向上
- ③ 情報収集力・情報活用力・論理的思考力の向上
- ④ トピックに関する知識や語彙の増加

ウ 課題

- ① 体系的な指導が必須である。
- ② 適切な論題の設定が不可欠である。
- ③ 異なる英語力をもつ生徒への適切な対応に留意する必要がある。
- ④ 教員研修が必須である。

(4) 英語使用の機会増加を図る体制づくりと環境の整備

ア 方法

- ① 大学, 研究機関等との効果的な連携
- ② 地域の小・中学校との交流と効果的な連携
- ③ 課外活動や海外姉妹校との交流
- ④ 外国籍子女等の受入れ

## イ 成果

- ① 課外活動と行事を体系化しようとする意識の向上
- ② 教員と生徒の小・中・大学との交流機会の増加
- ③ 他の高校の先進的な取組を参観する機会の増加

## 6 SELHiの成果を生かしたSELHi後の取組

成田国際高校はSELHiの1期校として授業改革に取り組んだだけでなく、SELHi終了後も、SELHiで得た成果の応用と定着、SELHiで残した上述の課題の解決に向けて、千葉県教育委員会の支援を受け、C-SELHi（Chiba SELHi：チバ・セルハイ）（平成17年4月～平成20年3月）に取り組んだ。その結果、下記の（1）～（5）のような発展的な成果をあげ、現在に至っている。

### （1）新英語科目「スーパーイングリッシュB」の開設

新教育課程における学校設定科目の中に本科目を設け、ALT主導で時事問題を扱うContent-based Teachingの授業を継続している。

### （2）新英語科目「スーパーイングリッシュA（ディベート）」の開設

国際科2年生の選択科目として当科目を設置し、「英語科セミナー」（ディベート・トーナメント）の実施に備えたディベート指導を継続している。

### （3）英語によるコミュニケーションを実体験するための機会の増大

「SELHi」、「C-SELHi（チバ・セルハイ）」の研究を経て、近隣の小学校や成田空港での英語を使ったインターンシップ、成田市内のイベントで英語を使ったボランティア活動、ディベート・デモンストレーションにおける大学生との交流など、生徒が自分の英語力を試し、さらなる学習への動機付けを高めるための機会を増やしている。

### （4）英語教育活動の客観的分析と体系化に関する意識の高揚

SELHi以前から実施してきた英語教育活動の効果を客観的に分析して改善し、活動全体を体系付けようとする意識が高まった。それにより、個々の活動の目標や効果をより明確に生徒に示して動機付けをすることができるようになった。

### （5）CIEP事業への貢献

千葉県が掲げるCIEP事業（Chiba International Education Plan：小中高連携による国際化への取り組み、平成14年度～現在に至る）において、SELHi、C-SELHiで培った成果を生かして、地域の小学校や中学校と有機的な連携を図り、「英語が使える日本人」の育成に向けて、継続的に努力をしている。これにより、平成20年3月に、文部科学大臣賞を授与された。

## 【2】山口県立華陵高等学校

### 1 申請時の状況

華陵高校がSELHiの研究指定を受けるのは2回目で、前回から通算すると6年目である。前回のSELHiでは、スピーチ、スキット、ディベート、ディスカッションというコミュニケーション活動を通して、英語で自分の気持ちや意見を表現できる「自己表現力」の養成をテーマに研究したが、平成18年度からのSELHiでは、「自己表現力」をリーディングと関連付けたプロジェクトを行っている。

### 2 研究開発課題

英語力の到達目標は、「英文を読んで、表面的な情報を読み取るだけでなく、概要を要約したり、意見を述べたり感想をまとめたりすることができる」ようになることである。掲げた研究開発課題は、「確かな自己表現力を培うリーディング指導のための、質・量からのアプローチ及び評価方法の研究開発」～高大連携による研究・分析を通して～というもので、その主なものは、以下の通りである。

- 自己表現力を培うリーディング指導法の研究開発
- 多読指導の充実
- シラバスの改善・充実
- 生徒のリーディング能力の実態把握
- 研究成果の公表

### 3 組織

華陵高校では、山口大学および山口県立大学の教員との連携が非常に緊密であり、助言を求めるだけでなく、実際の教材作成なども共同で行っている。管理職と英語科教員及び英語科教員間もともに緊密な連携がとれている。

### 4 指導方法

- ・英語による授業の実践。
- ・多読指導は、『華陵ウイークリー』とRead for the Stars の2つを柱とする。前者は教員が持ち回りで執筆して毎週発行している400語程度の英文記事であり、通算では213号にもなる(10月9日現在)。後者は、graded readersを教材とした多読指導である。学年ごとに目標語数を示し、1～2週間の多読期間を設けた後、ワークシートに読んだ語数と感想を記録させている。本年度は、現在までに2回実施した。現在、700冊以上の多読用の蔵書がある。
- ・Karyo Can-Do List に基づき、入学時から段階的にどのような力を身に付けるのかを示す Level 1 から Level 4 までの表を作成し、これをシラバスとして使用している。
- ・Karyo Can-Do List に基づき、Karyo Can-Do Test を独自に作成した。テスト項目は、Karyo Can-Do List と関連付け、問題文も書き下ろした。
- ・GTEC for STUDENTS 及び語彙レベルテスト (Schmitt et al, 2001) を定期的実施している。
- ・本校教員と運営指導委員からなる「リーディング指導法研究委員会」において、授業で用いたワークシート集を編纂した。

- ・リーディングの授業では、リーディング・プロセスに関わる指導を行うために、予習を課さずに授業中の英語を用いたタスク活動によるリーディング指導が実践されている。
- ・各教員のパソコンの中に LAN でつながった共有ホルダーがあり、授業のアイデアや教材などが教員間で共有されていた。
- ・教員同士が授業について常に話し合える雰囲気があり、互いの授業を見合うことに対して抵抗感がない。
- ・学校の SELHi のウェブページが非常に充実しており、誰でもその成果にアクセスできるようになっている。また、授業公開も頻繁に行っている。

### 【3】群馬県立中央高等学校

#### 1 申請時の状況

群馬県立中央高等学校は、「地球市民としての日本人」の育成を目指し、「コミュニケーション能力の向上」をねらいとして、群馬県教育委員会の協力を得て SELHi 事業第 1 期校に申請した。県立中央高等学校には、県内の進学校として進学実績を高めなければならないという現実的な課題と、生徒の英語力については、スピーキング力とライティング力、リーディングにおける論理的思考力と文法力の欠如、さらに意欲はあるが自己表現スキルに欠けるという学習実態を変えなければならないという課題があった。また、教員の英語授業指導法は、ジレンマを感じながらも、受験対策を意識した訳読中心の授業になっているという現実があった。

群馬県では、平成 13 年 4 月より、元国連事務次長の明石 康氏が県立群馬女子大学外国語教育研究所長に就任しており、群馬県は同氏のイニシアティブの下、英語を用いて国際的に活躍できる人材の育成を目指し、英語教育の「群馬モデル」構築を進めていた。また、同県は、県立中央高等学校の敷地内に、平成 16 年度には英語教育に重点を置いた中高一貫の県立中央中等教育学校の開校を決定しており、県立中央高等学校は「群馬モデル」構築に資する先駆的实践を行って、その実績を県立中央中等教育学校に引き継ぐことになっていた。

このような状況下で、同校英語科は、冒頭に記述した学校の目標実現に向け、英語授業指導法と教材の開発を柱に、中央中等教育学校の指針となるべき特色ある教育課程の研究を研究開発課題に含めて SELHi 申請に臨んだ。

#### 2 研究開発課題

研究開発課題の設定に当たっては、まず目指すべき生徒像を特定し、それを実現するため、4 技能のバランスが取れたコミュニケーション能力の育成を目指して、カリキュラムと授業指導法に関する工夫と改善を課題として掲げた。

##### (1) 目指すべき生徒像

- ア 国際的視野を持ち、世界の人々から信頼される生徒
- イ 進んで国際社会に参加し、協力できる能力や態度を身に付けた生徒
- ウ 英語コミュニケーション能力を備えた生徒

##### (2) 研究の取り組み

- ア 英語コミュニケーション能力向上のための英語指導方法の研究開発（発信型の教育を展開するための研究）
- イ 『学校の英語化』の推進に関する研究（「英語に慣れ親しむ環境づくり」を基本として『学校の英語化』を推進するための研究）
- ウ 英語指導法の改善や独自の教材開発等、英語教育における「群馬モデル」の構築を図り、その研究と実績を県内の中・高等学校へ普及
- エ 中央中等教育学校のための英語教育重視のカリキュラム開発

### 3 組織

平成14年度には、校長の下に SELHi 研究推進委員会を設け、委員長を教頭として、事務長、研究主任（英語科）、研究副主任（地歴科、教務主任）、さらに全教科の主任が委員としてこの組織に加わった。委員会の任務は、研究全体の企画・推進、委員会によって組織される各研究班との連絡調整・指示伝達、日程調整等である。委員会の下に、研究開発課題に沿って研究開発総務班が組織され、英語科教員を中心に他教科と教科外部会からも班員が加わり、学校を挙げて SELHi に取り組む体制を整えた。

平成15年度には、準備段階の中央中等教育学校英語科教員が SELHi 研究に加わり、16年度には、SELHi 研究推進委員会にも加わって、両学校が研究と活動で連携した。平成15年度には、群馬県立大学外国語研究所と連携して、授業法と教材開発のための定例研究会を、授業改善研究を目的として群馬県と共同で群馬県英語教育研究協議会を組織した。また、SELHi 研究の指導助言に当たる運営指導委員会は、群馬県教育委員会と協議して、研究課題の分野を専門とする大学教員に県内の有識者を加えた9名に委嘱した。

### 4 指導方法（特徴的な5点を記述）

#### (1) 授業研究と英語による授業の実践

県立中央高等学校で最も大きく変化した授業指導法は、「英語による英語授業」の実践である。SEHHi 事業が5年を経過した今日では、SELHi 校では英語で授業を行うことは驚くべきことではないが、平成14年 SELHi 指定の段階では、英語による英語授業は、指定校にとっても実験的試みであった。県立中央高等学校では、校長自らが英語による授業を行い、校内放送を用いて定期的にスピーチと聴き取りテストを行う等によって教員のロール・モデルとなり、それによって教員は大きな刺激を受けた。

コミュニケーション能力向上を目指して、英語科の全教員が、3年間で合計31回の校内研究授業を行った。また、授業後には授業研究を行って指導力を高め、すべての英語科教員が英語で効果的に授業を行うことが可能になった。平成15年度には、第1回群馬県英語教育研究協議会を開催し、県内の高等学校英語教員を対象に、英語科教員のほぼ全員が一斉に授業を公開して、参加者と共に研究協議を行った。平成16年度には、この会を全国規模に広げて開催し、県内の高等学校英語教員に加え、全国各地から多くの英語教員が参加した。英語科のほぼ全員が一斉に授業公開をする試みは全国的にも珍しく、英語教育の「群馬モデル」の構築にも大きく貢献した。

#### (2) 学校特設科目「Global Education」と他教科との連携

Global Education は1年次全員必修、2・3年次は文型コースの必修科目として、世界へ目を向け、世界の問題を解決する方法を自ら模索する生徒の育成を目指し、テーマを決めて他教科と連携した。また、群馬県立女子大学外国語研究所と定期的に研究会を持ち、シラバス作成、授業法研究、教材開発を行って授業の内容充実を図った。

#### (3) ミニスピーチ、レシテーションを通じた発信型授業の実践

英語授業の中で、3年間継続して1分間スピーチと1分間質疑、教師による1分間の評価を行った。これによって、生徒のスピーチ作成技術やプレゼンテーションに臨む態度が変容し、コミュニケーションを行おうとする意欲や態度が高揚した。また、校内スピーチ大会や授業を通して



行ったレシテーションの活動を外部コンテストにつなげる工夫をすることで、生徒のプレゼンテーションに対する意欲が高まった。これらの発表活動を組織的かつ継続的に行なったこと、授業内活動と教室外指導を有機的に結び付けたこと、更に、生徒に自己の考えを発表する機会をふんだんに与えたことが、発信型授業の成功の礎となった。

#### (4) 独自のコミュニケーション能力テスト開発とその有効利用

英語科の構成員が協力して、生徒の4技能の能力を測るために独自のテストを開発した。これを全校レベルで実施し、生徒のコミュニケーション能力の変化を学年比較と経年比較によって確認した。

このテストでは、学校の到達目標に照らして期待値を設け、この数値によって能力の伸長度を調べ、生徒に数値を示して個別にフィードバックを与えた。また、テスト問題と指導法にも改善を加えることを、繰り返し行った。最終報告では、外部の標準テストを用いたほうが簡単であったかもしれないという反省を残しているが、生徒をよく知る教員集団が問題を作成し、テストを実施したことで、テスト結果に基づく生徒の個別指導や教師の授業法改善、テスト作成技術の改善が可能になり、校内テストの在り方について一石を投じた。

#### (5) 教材の共有

効果的、かつ均質の授業が行えるように、教科書の予習プリント、授業で用いる資料を共有した。この過程では多くのディスカッションがあったが、教材の共有化によって授業が均質化しただけでなく、授業研究が深まり、指導法改善にも大いに貢献した。

## 5 成果

SELHi 1 期校には、英語科、国際科等の特色を有する高等学校が中心に選定された。ごく平均的な普通科高等学校の在学学生すべてを対象に取り組む SELHi 研究を掲げて指定を受けた県立中央高等学校は、第1期校の中では特異な学校であったと言える。しかし、同校は、SELHi 研究によって「群馬モデル」の構築へ貢献するとともに、日本の高等学校における英語教育改善にとっても、基本的かつ重要な示唆を与えた。同校では、授業研究を重ねることによって英語による授業が可能になり、学校の英語化、すなわち、教室外でも英語を使う環境づくり（校内放送、海外修学旅行、外国人留学生との交流、スピーチコンテスト、その他の英語活動）による相乗作用と生徒の意欲的な取組によって、生徒のコミュニケーション能力が大いに向上した。

生徒は、年度を重ねるごとに SELHi の意義を理解して自ら活動に取り組むようになり、発信型の能力を大いに高めた。また、進学成績も開校以来の記録的伸びを示し、教員集団は伝統的な授業の殻を打ち破り、発信型授業の実践で生徒の学力伸張が可能であるという自信を得た。群馬県立中央高等学校における SELHi 事業は、英語科の活動を超え、全教科、教科外部会が全校体制で取り組んだが、その取組を教職員一同が高く評価した。

群馬県では、県立中央高等学校が SELHi 指定のモデル校になり、平成19年度まで毎年指定校を輩出し、同校で行った実践の多くは後続校によって引き継がれている。平成15年1月には、当時の遠山文部科学大臣の SELHi 校視察を受けた。また、平成17年3月には、SELHi 研究の成果による「英語教育優良校」として、文部科学大臣表彰を受けている。

## 【4】山梨学院大学附属高等学校

### 1 申請時の状況

文法訳読中心の授業が展開されていた。気持ちの上では、よりコミュニケーション重視の授業の大切さを感じていたが、特に日本人教員は、あまり英語「で」授業を行うことはしていなかった。

### 2 研究開発課題

英語の「型」を習得し、それに基づいて自己表現が自由にできる「自立型学習者」の育成を目指す指導法の研究。

### 3 組織

副校長を中心に、英語科と英語活動と関係してくる社会科（ディベート、ディスカッションの内容）、国語科（ディベート、ディスカッションの方法）、数学科（研究の統計処理）の教員を含めた組織。

### 4 指導方法

ALT とのチーム・ティーチングを重視。学習者中心を心がけている。日本人教員が文法等の「型」を教授。

### 5 成果

- (1) **Basic Teacher**（日本人教員）による英語の基礎の習得と定着（型の習得）を行うことで、基礎力が弱い生徒の底上げに成果をあげている。
- (2) **ALT** とのチーム・ティーチングによるタスクやプロジェクト型中心の授業において、生徒が実際に英語を使う場面が多くなっている。また、外国からの留学生と一緒に授業に加わることにより、良い雰囲気での授業が展開している。
- (3) **GTEC for STUDENTS** の結果を見ると、リスニング、リーディング、ライティングの各セクションともかなりの伸びを示しており、生徒のアンケート調査の結果等からも、生徒の英語に対する興味関心が高くなっていることがわかる。
- (4) 生徒が、努力している教員に対して非常に好意的な気持ちでいる姿が印象的である。  
「誰のように英語が使えるようになりたいか」と質問すると、自分が実際に習っている教師の名前が何名かの生徒から出てきた。
- (5) 教員間の協力体制もしっかりしている。これは、学校全体としての取り組みになっていることが大きな要因だと思われる。

## 【5】東京都立千早高等学校

### 1 申請時の状況

民間から校長を迎え、国際化を目指して出発したが、当初は英語科教員の反応は否定的であった。SELHi 申請前に教員と話し合いを持った際も、決して積極的ではなかった。

### 2 研究開発課題

多読を通して英語のリーディング力を育成するとともに、英語によるプレゼンテーションを行うことで、アウトプット重視の授業を進める。

### 3 組織

校長をトップに、英語科教員がそれぞれの役割を持ち、全体として良い取り組みとなってきた。運営指導委員会や研究協議会において、英語科以外の担当教員も積極的に参加し、協力体制が確立してきた。

### 4 指導方法

研究開発課題の一つである多読は、電気通信大学の指導の下、生徒たちは、様々なレベルの本を読んでいる。基本的には、生徒が自由に好きな本を読む、という形式で行われている。

もう一つのアウトプット活動は、チーム・ティーチングだけでなく、日本人教師がすべて英語で授業を行い、生徒は、グループやペアで与えられた課題をこなしている。

### 5 成果

(1) 多読に関しては、学年を経るごとに語数、wpm 等が伸びており、GTEC for STUDENTS のリーディング・セクションのスコアとの相関もある程度出ている。全体として、特に英語が好きな生徒に対しては大きな効果を生んでいる。

(2) アウトプット活動については、初年度と比べて、2年目以降、生徒の発話量は確実に増えている。また、ノート・テイキング、ストーリー・リテリングなどを見ても、しっかりできるようになってきた。

(3) アウトプット活動の成果をどのように評価するかについては、まだ今後、検討する余地はあるが、活動自体は生徒も積極的に取り組んでいる。

(4) 教員がまとまって取り組むようになったことは、大きな成果である。

(5) 東京都の中高教員の研修で千早高校の取り組みが取り上げられ、他校の英語教員に参考となる事例を提供している。

## 【6】富山県立富山南高等学校

### 1 申請時の状況

富山南高校の指定は、平成15～17年度である。したがって、SELHi 第2期の指定校の1つで、富山県に限れば最初の SELHi 指定校になる。SELHi の初期の指定校は、その多くが SELHi 対象クラスを国際コースなど特定のコースに限定して展開していた。特に、第1期指定校は、英語を強化するのに十分な資産と英語能力の高い生徒を有していたが、富山南高校は、当初から対象を全学の生徒として取り組んだ。

SELHi への申請については、学校内でのコンセンサスが取れていたとは決して言えない状態であった。校長の意気込みと決意には他を圧倒するものがあつたが、英語科の教員はそのトップダウンの決定に戸惑ったという形に近い。校長は、早速、地域や他県の外部機関を訪ね、英語教育を専門とする人々に対して、SELHi という仕組みを借りて新しい英語カリキュラムを開発したい、そうすることで、生徒に大学進学だけでなく、自ら考え、それを表現できる力を養ってほしいという思いを伝えた。外部からの評価は一様に肯定的なもので、後に校長は、その励ましが SELHi に申請する大きな力になったと述懐している。

### 2 研究開発課題

「国際社会で活躍する人材を育てるための英語運用能力を高める方法の研究～」

(自分の考えを明確に持ち、それを英語で正しく表現し伝えることができる能力の向上を目指して、授業を改善し、自分の考えを発信する活動を重視した指導方法を研究開発する。)

これを実現するための具体的な方法として考えられたのが、

- 国際理解のための行事を行う
  - 自学自習を支援する IT 機器を活用する
  - ALT や学校外の人材と連携し、実践的コミュニケーションの場を作る
- というものであった。

「国際社会で活躍することのできる英語運用能力を育てる」というテーマは、富山南高校に限らず、日本のすべての高校でも目指していきたい普遍的なものだろう。しかし、それが逆に、富山南高校の研究開発を漠然とした特色のないものにしたことは否めない。第一に、どうすれば目指す英語運用能力を身に付けることができるのか、具体的な手順が示されていない。どのような活動を通じて自分の考えを英語で表現できるようになるのか。それは、行事や学外での活動に参加することで達成できるのか。第二に、普遍的なテーマであるが故にすでに似たような実践例がいくつもあり、具体的な方法として挙げられた特別行事、IT 機器、ALT や学校外の人材の活用などは、いずれも目新しいものではない。さらに、これらはどれも授業外の活動である。核となる日々の授業でどのような指導法の改善を行うのかを具体的にせず、イベント的な活動に活路を見出していく研究開発は不安定である。

しかしながら、これは富山南高校に限った問題ではない。研究テーマを設定する際には、研究目標が他校とも共有できる普遍性を持っていなければならない。そうでなければ、特定の学校の研究開発の成果を他校が取り入れることができない。しかし、研究を実際に行う際には、それが特定の

現場の状況に則したものであることが求められる。つまり、なぜその研究をその現場で行う必要があるのかという合理性を確保するということだ。普遍的な目標と具体的な研究実践の双方を満たすことは、容易ではない。

このようなことから、富山南高校は、SELHiの開始早々に方向転換を迫られることになった。再検討を重ねた結果、研究の方法を、以下のように修正した。

- SELHiの研究対象を全校生徒とする。
- 英語で授業を行う。
- 実践的コミュニケーション能力の育成が真の英語力の定着につながり、大学入試等にも対応できることを示す。
- 個々の行事や事業を生徒のモチベーションを高める場とするだけでなく、習得した4技能の運用の場、また、その評価の場として明確に位置付ける。

上記4点の背景には、「どの学校でもできる実践例を示す」という基本指針があった。大学入試のための英語能力も実践的コミュニケーション能力の一部であるという富山南高校のモデルは、コミュニケーション能力育成を目指した英語カリキュラムを行っても入試実績を犠牲にはしないという意味を持っている。

### 3 組織

このようにして、富山南高校のSELHiは、修正を加えることで最初の山を乗り越えた。英語での授業が定着した2学期になり、文部科学省による実地調査を迎えることとなった。そこで、学校独自のスピーキングとライティングの評価方法を開発するように提案があったが、それが新たな試練となる。評価作成に当たり、各英語教員の英語観が異なっているという困難を乗り越えて、一定の評価規準を作り上げた。

こうして方向性が固まった頃に、人事異動により、旗振り役であった校長と英語科の半数の4名の教員が富山南高校を去っていくことになる。幸いなことに、かつて英語教員であった新校長以下、意欲的な新しい英語教員が2年目以降その穴を見事に埋め、英語科教員同士の協力体制が整うことになる。

初年度から度重なる試練を経験しながら、英語科内で教員同士が本音をぶつけ合い、意見の違いを乗り越えて協力体制を築いていったことは、それ自体に大きな価値があったに違いない。

### 4 指導方法

富山南高校の英語の指導方法は特別なものではない。しかし、3年間の指導計画を作成し、各科目のシラバス作成をして評価方法を研究するという、カリキュラム作成の王道を進んでいった。こうして、当初は隙間が多かった箱に、体系的にパーツが組み込まれていった。

授業実践の中で最大の特徴となったのは、英語で授業を行うことの徹底である。このことについて、教員の間で繰り返し出てくるのが、「教員よりも先に、まず生徒が英語のみの授業に適応した」というコメントである。英語で授業を行うことについては、その是非について様々な意見が聞かれるが、まずは試してみてから意見を言うべきであろう。少なくとも富山南高校の実践からわかったことは、生徒は一般的に教員が思う以上に適応能力があり、教員がそれを信じてあげられないまま日本語での授業を続けていただけなのかもしれないということだ。

富山南高校の研究開発は4技能すべてをバランス良く伸ばすことを目標としていたが、とりわけ時間をかけて強化に努めたのは、ライティングとリーディングである。ライティングは、機会を見つけて様々な授業で書く機会を設け、教員も膨大な量の採点と評価規準の見直しを繰り返した。そのような活動を通して、生徒の作文は、語数はもとより、内容・構成の面でも著しく向上した。リーディングでは、生徒に大学入試センター試験の問題を活用して wpm を記録させたり、多読ライブラリーを活用させたりして、読む力を強化した。これらの活動の直接的な効果であるかどうかはまだ検証の余地があるが、外部テストによるリーディングは、SELHi 指定以前と比べて大きく向上している。

## 5 成果

このようにして積み上げてきた成果は、まず生徒に表れた。大学入試センター試験で平均を越えることがなかった同校が、初めて平均を越えるレベルに達した。SELHi 型の授業で、大学入試にも対応できることが示されたのである。

誰の目にも明らかな試験の結果だけでなく、生徒の英語でのやり取りに対する柔軟性が格段に上がってきた。授業を見に来た方が、生徒の様子について、「気負いがなく、自然に英語で応対ができている」と評していた。SELHi が終了した現在でも、富山南高校を訪問した者は、授業内外の生徒の生き生きした姿に印象を受けると言う。

また、何よりも大きな成果は教員に表れている。一つの授業を意味のあるものにするためにシラバスを作成し、評価方法を検討し、教材研究をするという一連の作業を丁寧に行うようになった。当然のことかもしれないが、教員の本質的な作業に時間をかけている充実感があつたと語った教員もいた。さらに、英語教員が集まり、カリキュラムの方向性や評価方法などについて話し合うことが日常的になった。これは、現在でも継続されている。

数々の試練を抱えて船出をしたことを考えると、奇跡的な成果とすら思える。教員の目に見えない所での努力を見ずして、富山南高校の SELHi の本質は決して理解できないと思われる。ここでの SELHi 研究は、普通の学校が普通の実践を真っ正面から行えば、どれほどの成果が得られるかを示すことになった。

スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi)  
事業の検証に関する報告書

発行日 平成 23 年 11 月

発行者 国立教育政策研究所

〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2

連絡先 国立教育政策研究所 教育課程研究センター研究開発部